反核医師ジャーナル

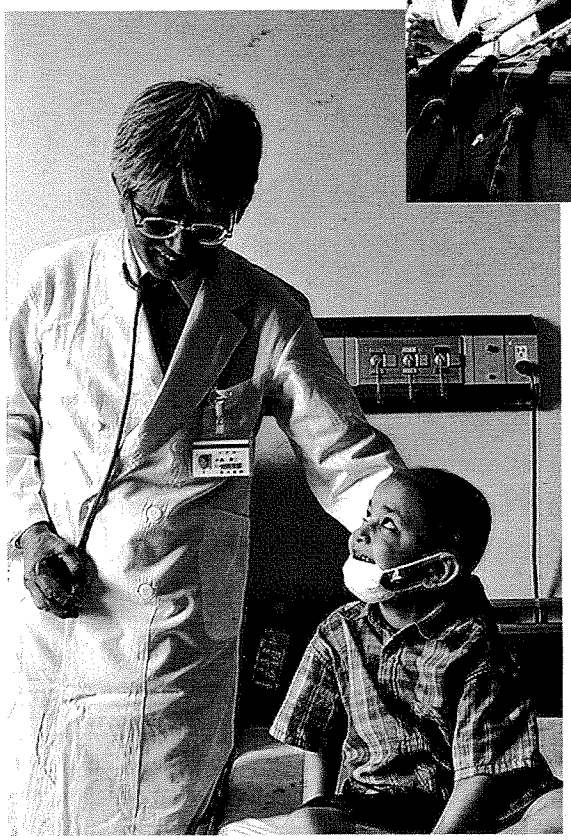
第50号　発行：核戦争に反対する医師の会

2004年10月20日
vol.22　No.1

（名古屋市昭和区妙見町19－2
愛知県保険医会館気付
TEL052－832－1345）

イラクの子どもの治療と医師の研修

日本で初めての受け入れ



２００４年１月９日、イラクのバスラから来た白血病のアッバース君の治療と、イラク人医師の研修受け入れを発表する記者会見（左から小島小児科教授、大島院長、モハメド医師、アサード医師。名大病院にて）

「困難な治療を名大でやるということは、世界の中で名大が選ばれたこと、価値のある国際貢献だ」（大島名大病院院長・当時）

「前からこういう協力はしたいと思っていた。治療の必要な子どもはどこの国であろうと受け入れるという姿勢を表したまで。何とか治して帰してあげたい」（小島小児科教授・写真左はアッバース君と）

詳細は、２～３ページの「イラクへの医療支援の取り組み」の特集記事をご覧ください。

イラクに多彩な医療支援
子どもの治療と二人の医師の研修、名大病院が受け入れ

戦禍に苦しむイラク国内の病院では、医薬品や衛生材料、医療機器などの深刻な不足状態が続いている。

こうした中で、核戦争に反対する医師の会は、イラクへの医療支援に取り組むNGO団体「セイブ・イラクチルドレン名古屋」（代表小野万里子弁護士）が行う活動に協力して、これまでに、次のような取り組みをすすめてきた。

①イラク人医師を招いて、イラクの医療事情などを聞く講演会の開催。特に劣化ウラン弾の影響と思われる健康被害の告発

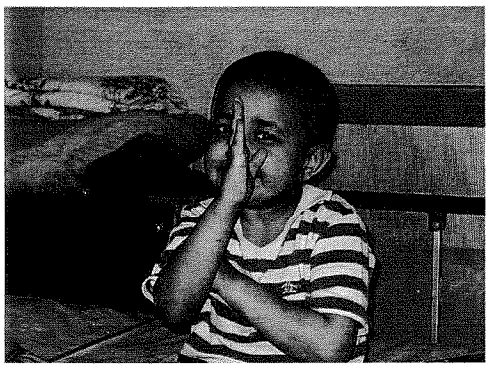
②白血病の子どもの名大病院での治療受け入れ支援

③イラク人医師の名大病院での研修受け入れ支援

④イラク国内の病院への医薬品の贈呈

⑤中古の医療機器・器材を贈る取り組み

⑥イラクで必要とされる医療支援に関する情報発信



湾岸戦争後、多発する癌や白血病・先天性障害など

昨年八月にセイブ・イラクチルドレン名古屋がバスラ教育病院のアル・アリ医師とバスラ母子病院のジャナン・ハッサン医師を招いたときに、核戦争に反対する医師の会は、湾岸戦争後の子どもたちの健康被害とイラクの今について聞く「イラク人医師と語り合う会」を開いた。

劣化ウラン弾が大きく関与していると見られる白血病や癌、先天障害などの多発を知って参加者はその深刻さに大きな衝撃を受けた。（講演内容は、反核医師ジャーナルNo.49に詳報）

それ以来、両医師のデータを活用し、浅野晴義、齊藤みち子、塩之谷香各医師が講師として出かけ、イラクで起きている深刻な健康被害の実態を知らせる活動をすすめてきた。講演先は、北海道、東京、新潟、栃木、京都、大阪、鳥取など文字通り全国各地にわたり、合計三十か所を数えている。

イラクに希望のメッセージを白血病の子ども受け入れ

『ヒロシマの国』日本から、充分な設備と薬があれば病気は治るという希望のメッセージをイラクに送りたい」

そんな思いから、イラクで治療が困難な白血病の子どもの治療を受け入れる活動が始まった。

名大病院での白血病の子どもの治療受け入れが決まって以降、治療費のための募金やイラク人医師の研修受け入れ支援などの活動も急ピッチですすめられた。

そして一月九日には、白血病の治療のためにアッバース君（五歳）と母親のアヌワールさんが来日、同時に、白血病治療の研修のためにアサード（バスラ教育病院）、モハメド（バグダッド・セントラル教育病院）両医師も来日した。

受け入れ先の名大病院で行われた記者会見で、大島院長（当時）は「記者会見というといつも暗い話が多いが今日は明るい話題で話ができて嬉しい。十一月に話を聞いた時とても良いことだと思った。困難な治療を名大でやるということは世界の中で名大が選ばれたこと、価値のある国際貢献だ」と述べた。

また、小島教授は、「前からこういう協力はしたいと思っていた。今も外国籍の子どもを受け入れているので特別なことではない。治療の必要な子どもはどこの国であろうと受け入れるという姿勢を表したまで。何とか治して帰してあげたい」と語った。

アッバース君の帰国は延期モハメド医師は八月末に帰国

アラビア語しかはなせないアッバース君親子は、入院当初は意志疎通ができず、また宗教上の習慣や食事などで戸惑うことも多かったが、今ではたくさんの日本語も覚え、治療プログラムに沿って化学療法を続けてきた。

七月八日に退院し、現在病院近くのアパートから週二回外来で治療を受けている。

順調にいけば、八月三十一日に帰国の予定であったが、肝機能が改善されず、また、帰国後の感染の心配もあり、帰国を延期し、現在広島で研修中の主治医フッサーム医師（バスラ母子病院）と一緒に、十月末に帰国する予定となった。

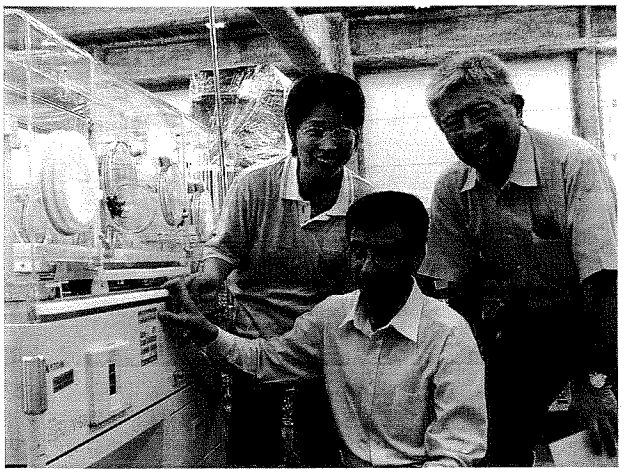
八か月間の研修を終えたモハメド医師は「日本で学んだ医療技術をイラクで生かしたい。母子手帳や学校健診のシステムを普及させ、一人でも多くの子どものいのちを救いたい」と決意を語って、八月三十一日に帰国の途についた。

アサード医師は、四か月間研修期間を延長し、引き続き骨髄移植を含む血液疾患の治療を学び、イラクに白血病やがん治療の専門センターの建設を目指して研修を続けることになった。

二百種類五万点の中古医療機器・器材
バスラの二病院に贈る

核戦争に反対する医師の会は、愛知県保険医協会とともに、イラクへの医療支援の一環で、中古の医療機器・医療器材を贈る取り組みに協力してきた。

「セイブ・イラクチルドレン名古屋」の活動に協力して、六月十日から開始したイラクに中古医療機器を贈る取り組みは、一月余りの募集期間に約五十医療機関から二百種類・五万点に上り医療機器・器材の提供があり、コンテナ五台分、総重量八トンにもなった。超音波装置、心電計、遠心分離器、手術器具セット、ベッド、車いすなどを積んだコンテナ船は、八月三日に名古屋港を出港し、九月二日にクウェート港に入港。通関手続き等を経て九月初めにイラク南部にあるバスラ教育病院とバスラ母子病院に届けられた。



助け合いの精神が実を結ぶ

この取り組みについて、マスコミのインタビューに応じた堀尾仁保険医協会理事長は「イラク戦争によって現地の病院では医療機器が不足して治療ができないと聞き、医療人として看過できないと思った。医療機関の経営は苦しい中にあるが、助け合いの精神はなくなっていない。協会のよびかけに応え、すぐ役立つものが短期間にこのようにたくさん寄せられた。これらの機器がイラクの医療機関の支援に役立つなら本当にうれしい。」と感想を述べた。

八月二日に名古屋港で医療機器の贈呈式を開催

八月二日、弥富町の日通富浜流通センターで、医療機器の贈呈式が行われた。

贈呈式では小野代表が、支援への感謝を述べるとともに、「爆弾の中でどれだけの命が散り、傷ついているかを忘れないで欲しい」と訴えた。

また、保険医協会を代表してあいさつに立った大川浩正監事は、「命を守り育てることを仕事とする医療人として今日はほんとに嬉しい」と述べた。

名大病院で研修中のアサード医師も参加し、「湾岸戦争以降、イラクには医療器材が入ってこない。贈られた医療機器は、私がイラクに必要と思っていたものばかりで、とても嬉しい。これで多くの命が救われる。心から感謝している。」と喜びを表していた。

CTは第二便で贈呈へ

人口二百万人のイラク第二の都市バスラには、CTが僅か一台しかないため、現地の病院からは、中古医療機器の希望リストの筆頭にCTが挙げられ、熱望されていた。

しかし、CTについては、八月出港には間に合わず、現在、東芝メディカルの協力を得て、第二便で贈る準備をすすめている。

既に、公立尾陽病院のCT入れ替えに伴い、九月十七日には更新されるCTを無償で譲り受けることが決まり、輸送の準備に入っている。

しかし、贈った後の機械の組み立てや調整を行うための東芝メディカルの技術者は「現状ではイラクに入れない」ため、贈ったCTを稼働させるためには、クリアしなければならない課題も多い。

事実、日本から導入された新品のCT四台も、バグダッドの倉庫で眠ったまま放置されているという。

そこで、セイブ・イラクチルドレン名古屋では、イラク人技師にCTに関する技術を直接伝えるために、九月十六日から十月十五日まで、バスラ教育病院とバスラ母子病院の技師を招いて、東芝メディカルの協力で研修を行うための受け入れ支援を開始した。

イラク国内の病院では、現在も医療機器の深刻な不足状態が続いている。セイブ・イラクチルドレン名古屋は、一日も早く正常な医療活動ができるように、支援活動を継続してすすめることにしている。

核戦争に反対する医師の会も、保険医協会とともに、イラクへの医療支援の活動に協力することにしている。

募金ご協力のお願い

医療機器材の提供や支援募金に多数の方のご協力ありがとうございました。募金は現在百万円近く寄せられています。

引き続き、第二便のCT輸送のための募金にご協力ください。

募金先

●郵便振替

00890・6・12008

「愛知県保険医協会」あて

※同封の振替用紙をご利用ください。

核戦争に反対する医師の会 22周年記念講演会
劣化ウラン弾被害の実相に迫る

核戦争に反対する医師の会は五月二十二日（土）、保険医協会伏見会議室を会場に二十二周年記念講演会を開催。琉球大学理学部教授の矢ヶ崎克馬氏が「劣化ウラン弾とは何か—劣化ウラン弾の人体への影響を考えるために」のテーマで講演を行った。会場は立ち見の人も出るほどの百七十人余りの参加者で満員となった。

◆矢ケ崎氏、内部被曝の危険性を強調

矢ヶ崎氏は、湾岸戦争やイラク戦争に大量に使用された劣化ウラン弾の特徴として、①金属ウランの重さと硬さを利用して、ボールペンほどの大きさで戦車の装甲をも射抜く兵器としての「優秀性」、②放射能兵器としての性質（標的に衝突すると燃焼、千分の一μのウラン微粉末になり、人体に侵入したα線が体内に留まって体内被曝を引き起こし遺伝子や染色体を傷つけることで癌や奇形を誘発する）—を解説した。

劣化ウラン弾主成分のウラン238の半減期は四十五億年であることから、その環境汚染は末代まで人類に被害を与え続ける可能性があると話した。

また、放射線の特質からくる外部被曝と内部被曝の違いを紹介しながら、国際放射線防護委員会（ICRP）やWHOの規準（体が受け止めたエネルギー量を体重で割り出して求める方式）は、外部被曝には適用できるが、体内に取り込まれたα線がもたらす内部被曝には適用できないと、その非科学性を批判した。そして、WHOがこの規準に沿って放射能の危険性を過小評価していることが、アメリカの劣化ウラン弾を免罪していることにつながると指摘した。

※五～七ページに資料の一部を転載

イラクで多発する癌

矢ヶ崎氏は、昨夏、当医師の会講演会でアル・アリ、ジャナン両医師が述べた湾岸戦争後のイラク・バスラでの発癌等の健康被害のデータにも言及。湾岸戦争前の一九八八年と比較して二〇〇〇年以降は癌死亡数が二十倍に達しており、家族内で複数癌患者発生や一人で異なる種類の癌発症などが多数報告されていると述べた。

◆セイブ・イラクチルドレンの医療支援活動

続いて、イラクの医療支援に取り組む「セイブ・イラクチルドレン名古屋」代表の小野万里子弁護士から、イラクに医薬品を贈る活動や、劣化ウラン弾によると見られる子どもの白血病治療を受け入れる取り組みについて報告があった。名古屋大学病院で研修中のアサド、モハマドの二人のイラク人医師からはイラクでの健康被害の実態報告と支援の訴えがあった。

◆医師の会総会で新体制と規約改正決める

医師の会は、講演会に先立って総会を開催。一九八二年の創設以来代表だった飯島宗一氏の死去に伴い、新代表に堀場英也氏、事務局長に中川武夫氏、同次長に土井敏彦氏を選出した。

医師の会代表 飯島宗一氏が死去

核戦争に反対する医師の会が発足した一九八二年四月十一日以来代表だった飯島宗一先生が、三月一日死去した。

飯島先生は、広島大学学長の任期を終えて名古屋大学に戻ってのち一九八一年から学長に就任したが、愛知で核戦争に反対する医師の会結成の動きが始まった当初からこれに賛同。発足と同時に代表を引き受けられた。

先生は発足総会の講演で、「ひとたび核戦争が起きれば、被害の除去も治療もできなくなるのが広島・長崎の教訓だ。核戦争の中では医師の責任を果たす道はない。だから医師は核戦争に反対せざるを得ないのだ。職能的な責務として被爆の病理を学び、核戦争の防止、平和の実現に力を尽くしてほしい」と語り、終生その信念は変わらなかった。

JSAおきなわ リーフレット 2004-2

内部被曝について考える

矢ヶ崎 克馬（琉球大学理学部）

1. 国際放射線防護委員会(ICRP) 1990年勧告は、内部被曝について評価する資格がない

1-1. 国際放射線防護委員会勧告

以下は、国際放射線防御委員会の規準です。

吸収線量の考え方
吸収線量は、ある一点で規定することができる言い方で定義されている。しかし、この報告書では、特に断らないかぎり、1つの組織・臓器の平均線量を意味する。(2.2 基本的な線量計測量)
放射線防護上関心のあるのは、一点に於ける吸収線量でなく組織・臓器にわたって平均し、線質について加重した吸収線量である。(2.2.2 等価線量)

国際放射線防御委員会の規準では吸収線量を、被曝した微小領域で本来規定すべきであるが、臓器当たりの平均量で評価することを規準とすると宣言しています。この方法は内部被曝を科学的に評価できるものではなく、著しく過小評価するものです。これを具体的に説明します。

1.2 内部被曝と外部被曝の違い

図1に示すように、放射能が身体の外部にある場合と内部にある場合では、被曝の状況が根本的に異なります。

外部被曝

放射性物質（放射能）が体外にある場合には、飛程の短いアルファ（α）線やベータ（β）線は、放射線物質がすぐ近くにある場合を除いて、あまり身体には届きません。届いても皮膚近くでとまってしまいます。ガンマ（γ）線だけが身体を貫きます。この場合は、身体全体に当たると仮定してよい状況で、国際放射線防護委員会（ICRP）モデルを適用できます。すなわち、身体で受けとめたエネルギー量を体重で割ったものが吸収線量だと評価できます。また、身体との相互作用が希薄であるためイオン化（後述）は疎（まば）らであり、体内のどこにあるいはどれだけ密集してイオン化がなされるかということも確率的であり、遺伝子や染色体の損傷も線量に比例していると考えるのが妥当です。

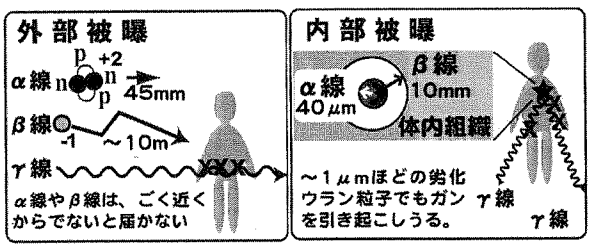


図1　外部被曝と内部被曝の被曝状況の違い

内部被曝と高密度イオン化

しかし、内部被曝の場合は事情が一変します。飛程の短いα線とβ線は身体の中で止まってしまうので、持っているすべてのエネルギーが細胞組織原子のイオン化等に費やされます。

図2に示すように、特にα線は飛程が40マイクロメートルで、その間に420万電子ボルトを失います（電子ボルトはエネルギーの単位：電子を1ボルトの電位差で加速して得られる運動エネルギーに等しい）。平均イオン化エネルギーは32.5電子ボルト程度なので、たった40マイクロメートルの間にほぼ10万個（≒4,200,000/32.5）のイオン化がなされます。イオン化とは、マイナスの電気量を持った電子

7ページへ続く

緒になれない可能性が高まります。図３に、ちょん切られた原子同士が再結合するときの、イオン化が疎らである場合と高密度の場合の違いを示します。

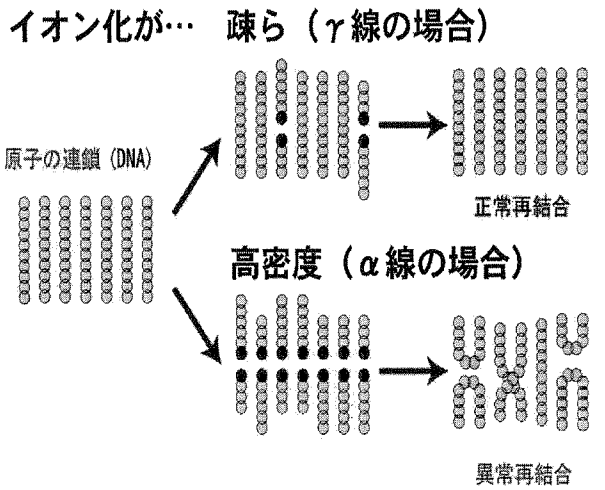


図３　再結合 –イオン化が疎らなときと密なときの違い–

高密度被曝の場合は再結合するときに相手を間違え、ＤＮＡの塩基配列が正しく修復されない確率が高まります。これが一発一発のα線で引き起こされるものですから、疎らにイオン化されたばあいと比較にならない危険度があります。もちろん、ＤＮＡが損傷を受けたとしても、遺伝情報やその発現のコントロールが影響を受けるのは一部の場合に限られますし、ヒトは発がんに対して２重３重の防御機構を持っているといわれます。しかし、多数のα線による内部被曝でできるＤＮＡの異常のすべてを防御できるものではありません。

α線発生源が体内に取り込まれた場合には、周囲のごく狭い範囲に強い影響を及ぼすことを正当に評価すべきです。この特質は、劣化ウランの微粒子が体内に侵入した場合には、多数のがん患者が発生する可能性を説明しうる充分な根拠になります。ウランが発がんを誘発する根拠は充分すぎるほどあると言えるのです。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

2-2.　低レベル放射能の危険

もし、ウラン微粒子から（１秒当たりに）α線がものすごくたくさん打ち出されるならば、切られた原子同士が再結合しようとする暇無く、切られっぱなしとなります。その場合には細胞が死んでしまうと考えられます。それに対し、ウランからのα線は“低レベル”といわれるように時間当たりにして少数のα線が打ち出されます。試算すると、直径５マイクロメートル（千分の５ミリメートル）のウラン微粒子の場合に打ち出されるα線は１日当たり１個程度となります。直径がそれ以下だと充分再結合の時間があります。ウラン微粒子が体内の一カ所に長時間とどまる場合は、劣化ウランは低レベル放射能だからこそ、細胞死が生じないレベルでＤＮＡなどの物質を損傷すると考えることができ、発がんの危険がより大きいともいえます。

2-3.　原爆と内部被曝

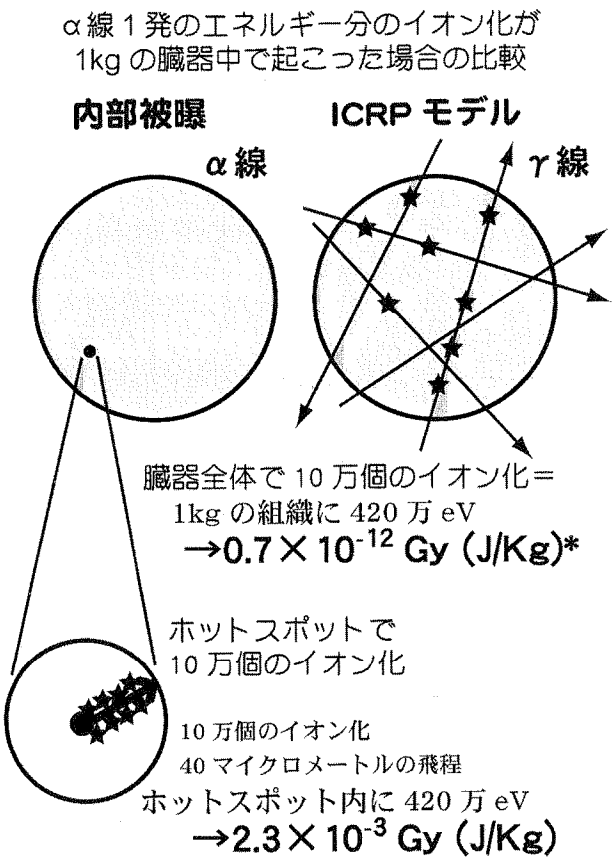
原爆の場合の、直接浴びた一次放射線はγ線、中性子線です。中性子線は電子を吹き飛ばしてイオン化させるのではなく、原子核にぶつかり、原子を放射能化します。この場合主としてβ崩壊の放射能となります。核分裂してできた原子はいずれも半減期の短いβ崩壊放射能です。黒い雨などに含まれる放射能の大部分は半減期の短いβ崩壊です。爆発直後はものすごい放射線の強さがありますが、半減期が短いものが圧倒的に多いので、時間とともに減衰し、やがて治まりました。β線（電子線）はα線のばあいと同じように考察できます。α線放射もβ線放射もγ線の放射が伴いますので、黒い雨に打たれた人や、原爆が炸裂してまもなく爆心地に入域した人は内部被曝だけでなく、外部（残留放射能）からのγ線による被曝もともに健康を害したことと思います。しかし、内部被曝の影響の科学的評価がきちんとなされていたならば、今日の原爆症認定の非人間的な国家基準はもっと形を変えていたかもしれません。原爆症認定のプロセスにおいても、低線量・低レベル放射能の内部被曝がキーポイントとなります。

パンフレット『いま、イラクのこどもたちは』

５～７ページで引用（転載）した矢ヶ崎克馬氏の講演資料『劣化ウランはなぜ恐ろしいのか』『内部被曝について考える』の必要な方はご連絡ください。

一方、この両資料の内容をまとめて解りやすく要約、併せてイラクで多発している癌や白血病、先天異常についてアル・アリ、ジャナン・ハッサン両医師が報告しているデータと写真を編集した（編者 斉藤みち子医師）カラーのパンフレット『いま、イラクの子どもたちは』（全国保険医団体連合会発行）が好評です。ご希望の方は、必要部数・送り先をご記入のうえ、下記のＦａｘあてお申し込みください（無料）。　FAX 052-834-3584

が原子から吹き飛ばされ、原子がプラスの電気量を持つイオン（中性でなくなった原子や分子をイオンと呼びます）となることです。その時、結合していた原子同士が切断されます。放射線が染色体DNAの鎖を切断すると遺伝子が損傷を受ける可能性があるのです。



*Gy：グレイ。放射線の吸収線量の単位。物質1kgあたりに吸収する放射線のエネルギー（ジュール）を示す。

図２　集中したイオン化とＩＣＲＰモデル －ICRPモデルでは内部被曝の評価はできない－

1-3.　被曝の評価－こんなにも過小評価されている－

ウランの場合はα線放射です。この場合、イオン化の程度は、α線の短い飛程内の隣り合う原子すべてをイオン化するという密集度です。つまり、ものすごく高密度のイオン化がなされます。一方、図２の右図に示すように、もし、同じ10万個のイオン化が例えば１キログラムの臓器全体で疎らに発生する場合には、イオン化はすべて孤立した状態で散在することになり、γ線の低線量被曝の状態と一致します（右図にはγ線被曝の状況を描いています）。この場合は文字どおり低線量被曝となりα線内部被爆の場合と比較すると、質量当たりの吸収エネルギーでは10の９乗（10億）倍もの差があります。

国際放射線防御委員会の規準は、図２の左図に示されるような被曝状況が右図に示される被曝状況に置き換えられて評価されるのです。隣り合う原子がすべてイオン化されているような密集したイオン化状況はなにも見えてきません。

1-4. まとめ

国際放射線防護委員会の規準では、α線およびβ線の内部被曝の評価は決してできません。γ線に照射される場合、すべてのγ線が同時にやってくるとは限らず、イオン化する場所も体のあちこちです。γ線の場合は時間的にも場所的にもイオン化は疎らです。それに対し、α線の内部被曝は同時に10万個というイオン化を狭い場所（40マイクロメートル内）に行うのです。そのため局所的には10億倍も線量評価が違うのです。

科学的に内部被曝を正しく考察することを放棄したICRP「規準」で線量評価を行うと、「劣化ウラン弾の放射能は懸念するに当たらない」という判断を導き出すところとなります。加えて、このような判断が放射線被害を真に予防する立場から離れると、「使用しても差し支えない」論拠となりうることも指摘します。また、バスラ地区等で報告されている多量の発がん・がん死亡の原因についても、体内に取り込まれた劣化ウラン微粒子が「原因物質である可能性」を重視できず、「科学的に解明されていない」として、放射能物質を撒き散らす劣化ウラン弾が戦争で使用されたこと自体に対する批判の目を曇らせる作用を導いていることも否定できません。

2.　高密度イオン化と低レベル放射能 －発がん率上昇をもたらす原因－

2-1.　異常再結合は高密度イオン化から

イオン化が高密度であることの影響は、単に打撃が集中していることだけではありません。生物学的にも（物理的に見ても）切られた結合は元に戻ろうとします。しかし、集中してイオン化を受けた場合には元の相手と一

「21世紀、沖縄から核・基地・戦争を問う～かたびらや命どう宝～」参加記

昨年の「核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい」は十一月一日～二日、沖縄県那覇市で第十四回のつどいを開催した。全国から医師・歯科医師・医学生など約百三十人、愛知からは七人が参加した。

一日目は記録映画「ヒバクシャ―世界のおわりに―」を上映。引き続いてダグラス・ラミス氏が記念講演を行った。

二日目は①核軍事基地沖縄と有事法制、②原爆症認定集団訴訟を勝ち取ろう、③平和教育の実践、の三分科会に分かれ、問題提起や報告を受けて熱心に意見交換を行った。

記念講演「ブッシュドクトリンで世界はどうなるか」を聴く

徳田　秋

（講師のC・ダグラス・ラミス氏は政治学者。一九三六年サンフランシスコ生まれ、カルフォルニア大学で政治思想史を学ぶ。元米海兵隊員の経歴を持つ。一九六〇年来日、京都、奈良、東京などで暮らす。元津田塾大学教授。二〇〇〇年から沖縄在住。）

政治でもっとも大切なことは、嘘をつかないことと、約束を守ることである。しかし、約束した相手の性格が変わってしまった場合であっても約束は常に守らなければならないのだろうか。たとえば、あなたが誰かからナイフを借りた、返す段になって、その相手が殺人狂になってしまっていたとしよう、それでも借りたナイフを返すのは正しいことだろうか。これはかなり難しい問題だ。

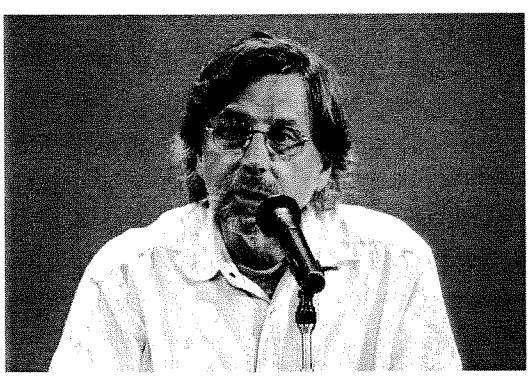
（話はプラトンの政治論を引用しながらこんな風に始められた。司会が演者紹介の中で「みなさんの半分よりは日本語が上手」と述べたのは、誇張やお世辞ではなかった。九十分の講演の中で一箇所だけ「脅威」というべきところを「脅迫」といったので少々ぎこちなかったが、それ以外はほぼ完璧かつ流暢な日本語であった。文責：筆者）

お分かりのように、私は日米安保のことをいっている。あの条約を結んだときのアメリカと今のアメリカとはまったく違っている。かつてのアメリカは「帝国主義的」だったかも知れないが、今では「帝国」そのものといっていい。

ブッシュ大統領はアメリカに次のような権利があると主張している。（一）米国を攻撃するかも知れない国に対して、（まだ攻撃を受けていなくても）先制攻撃する権利。（二）その国の政府が米国の気に入らなければ、これを武力に訴えて転覆する権利。（三）他国の主権を侵害して、その国内で人を逮捕する権利。こうして、最終的には人権を侵害する権利。

アフガニスタンで米軍に捕らえられた人々は、キューバのグアンタナモ米軍基地に収容されているが、こうした基地や公海上の軍艦の中にはどの国の主権も及ばず、国内法も適用されない。この人々は国際法上の「捕虜」として扱われていない。ブッシュはかれらを、通常の米国刑法によらないで、陪審も上告もない非公開の軍事法廷で裁くといっている。

アフガニスタンやイラクにおけるアメリカの振舞いは、現行国際法の秩序を破壊し、世界を第一次大戦以前の弱肉強食の無秩序に引き戻すものだ。たとえば今ペルー政府は、訴追のために元大統領・フジモリ氏の身柄引渡しを日本政府に要求しているが、日本政府はこれを拒否している。だからといって、ペルーが軍艦を出し、無警告で日本に武力攻撃を加えてもかまわないと考える人がいるだろうか。



アメリカが行ったのはまさに同じ行為ではないか。国際法は先例に基づく慣習法である。国際世論が今度の超大国アメリカの現行国際法を無視した行為を容認すれば、今後も同様なことが繰り返され、先制攻撃が普通のことにならないとも限らない。ブッシュ政権は、何世紀もかかってようやくできかかった国際法を破壊しつつある。

ブッシュ・ドクトリンを一言でいえば米国による世界統治である。アメリカは確かに変わった。だがそれは一般に考えられているように「九・一一」以後のことではない。「九・一一」はその変化を加速する契機だったに過ぎないのだ。

一九七五年、ベトナム戦争に敗れて以来、アメリカはまとまった戦争で一度も成功しなかった。アメリカ人は「ポスト・ベトナム症候群」という厭戦思想にとりつかれている、これを治して、アメリカ社会を立ち直らせるためには、もう一度立派な戦争をしなければならない。こんな考

え方をする人がアメリカの右翼の中にはたくさんいる。

一九九七年、「新アメリカ世紀プロジェクト（PNAC）」というネオコンシンクタンクが創立された。ソ連が崩壊して冷戦が終わったことにより、アメリカと対抗できる軍事力を持った国は存在しなくなった。この「卓越」を将来にわたって維持するために、軍事費は削減ではなく増強し、世界をアメリカの国益に合うものに作り直すべきである。その目的に沿った軍事・外交政策を立案するのがこのPNACなのである。

その中心会員には、チェイニー、ラムズフェルド、ウルフォイッツ、ボルトン、リッピなどがいて、ブッシュ政権発足とともにこれらの人々が政治の中枢に入り、アメリカ政府の執行部は「新アメリカ世紀プロジェクト」に乗っ取られてしまった。

「悪の枢軸」発言など、プロジェクトに沿った準備を進めてきた彼らにとって、九・一一は全くの僥倖であった。「これは戦争だ」と叫んだブッシュの記者会見に同席した彼らは、うわべこそ悲しそうにしていたが、思いもかけず早く訪れた戦争の機会にうきうきした様子がテレビの映像に表れていた。

今アメリカでは "He lied' they died（彼は嘘をつき、彼らは死んだ）" という言葉がひろがっている。ブッシュが議会や国民や国連に対して示したイラク攻撃の理由がすべて嘘だったこと、アルカイダとの関係も、大量破壊兵器の貯蔵も、核兵器の製造もすべて根拠のないことが明らかになったのだ。

政治家の犯した罪が小さい場合にはみんなが怒る。自分がその罪を犯すことを想像できるからだ。たとえば賄賂を受け取る誘惑なら理解できる。自分は受け取っていないのに彼が受け取ったのは許せない、というわけである。しかし政治家にしか犯せないような大規模な、歴史を変えてしまうような罪については、普通の人はそんな誘惑を感じたこともなければ、想像することもないので、怒らないというよりは信じない人が多い。そんなことをするはずがない、と思ってしまうのだ。

ブッシュの犯した罪は目をそらすにはあまりにも大き過ぎる。これに関心を持つ人々が増えればPNACの実現に大きな障害になるであろう。

2日目　第三分科会
「平和教育の実践」
山本　節子

琉球大学における平和教育講義を二十年続けてきた、堺英二郎氏（琉球大学助教授）によるその講義内容の紹介と受講学生の意識、評価など二十年間の模様の報告が、はじめにありました。受講者の総計は二千名を超え、毎年百名ほどの受講者を保持してきている実績は教育者の熱意と講義を支える研究会の組織的な活動の努力によって魅力のある講義を維持しているためと思われました。

日本の大学でこうした核軍備の危険性を科学的に学び平和を守るため必要な課題を広範な視点から人権、南北問題、経済開発、環境問題を含めて捉える講義を行っているところは、まず無いでしょうし、価値のあるものと思われるのでインターネットで公開するなどして多くの人が受講できる状況にないのが残念です。

二番目の報告は、石原昌家氏（沖縄国際大学教授）による検定教科書に登場した沖縄戦の歪曲を政府が日本の再軍備を円滑に進めるため、国民の無意識のうちに軍隊への脱アレルギー工作を初等教育から始める国家的策略としてその危険性を指摘されました。

このときに、日本の侵略戦争に伴う最も大きな民間人の犠牲を被った沖縄だからこそ平和を希求する思いが強いし、軍隊は一般市民を守る役割をしないものと身をもって学んだと改めて私は知らされました。この夏に軍隊を廃止したコスタリカを訪問して、内戦で二千人の犠牲があり軍隊廃止を国民が賛成したという説明が自分にはわかりにくかったのですが、実際に、沖縄のように家族や友人を殺されて、自国の軍隊がいとも簡単に敵軍隊として振舞うことを知って、あのコスタリカの人々も軍隊は必要ないし、存在がかえって危険であると結論したことが、本当に納得できたのでした。

三番目は、西銘圭蔵氏（沖縄民医連）がお孫さんの写真を見せながら家庭や環境のいろんな面で暴力でなく平和をまもることが大事であることを強調されました。

初めて、この集いに参加をしましたが、沖縄も初めて訪れ、貴重な機会に恵まれ楽しく学び、平和反核の運動にこれからも参加していきたいという思いを強くしました。

今年の「つどい」は十月九日から十日、北海道で開催されます。詳細は同封の案内をご覧ください。

原爆症認定を求める集団訴訟

甲斐昭さんに続いて三人が追加提訴

昨年四月十七日の第一次集団提訴に、原爆症の認定を求めて甲斐昭さんが広島の入市被爆者として参加、名古屋地裁に提訴した。第一回口頭弁論が昨年七月二十三日から始まったが、さらに今年六月十七日、第六回弁論に合わせて新たに三人の被爆者が提訴した。四人の原告団となり、八月二十八日の第七回弁論では、新しく加わった広島の被爆者の森敏夫さんと長崎で被爆した中村昭子さんの意見陳述が行われた。二人の被爆体験とその後の苦難の人生を聞き、名古屋地裁の大法廷を埋めた百人余りの傍聴者の多くがそっと目頭を押さえていた。

中村昭子さんの意見陳述

私は、昭和一九年三月、宮崎県の飫肥高等女学校卒業と同時に女子挺身隊に入隊。四月八日頃から三菱重工業長崎造船所飽浦工場で働くようになりました。飽浦工場は、軍艦、駆逐艦等を建造する軍需工場で、私は機械科第一検査係に配置されました。

〔被爆状況〕

私は八月九日、飽浦工場で働いている時、被爆しました。朝、出勤すると空襲警報が出ており防空壕に避難しましたが、警戒警報に変わったので事務所に戻り、上司の指示で同僚とともに書類を整理する作業中、突然、ピカッと閃光が光り、どーんという大きな音とともに、窓ガラスが粉々に砕け散りました。

私は倒れてきた棚の下敷きになり、気を失いました。気が付くと、左の額に棚があたり出血していました。友達が三角巾を貸してくれましたが血は止まりませんでした。友達とともに建物から出ましたが、工場の建物がいくつも倒壊していました。

工場で使う酸素ボンベを運搬していた三十歳くらいの韓国人の男性が、ボンベが爆発して大やけどをしていました。屋外でいつも仕事をしている報国隊の少女たちの一人は頭が割れ脳みそが見えており、半袖の子は腕が皮だけで体にくっついたまま泣き叫んでいました。

〔被爆後の行動の状況〕

上司から病院に行きケガの治療を受けるように言われ、私は友人の鬼塚きみよさん、布施久子さんと工場を出ました。因みに、鬼塚さんは後年白血病で死亡し、布施さんは自殺しました。

布施さんが知っているという病院に行こうと、北に向かいました。後からわかったことですが、それは爆心地の方角でした。川のほとりを歩いたり、飴のように曲がった線路を歩いたりして病院を探しました。浦上駅の近くまで歩いて行きましたが、周辺の建物の多くは倒れ、焼け野原の状態でした。途中で「黒い雨」に打たれました。私たちは、病院を探すことを諦め、油屋町にあった寮に帰ろうと、来た道を戻りました。

私たちが爆心地周辺を彷徨い歩いていた時に目の当たりにした情景を忘れることはできません。地獄絵というしかありませんでした。防火水槽に頭を突っ込んで息絶えていた人、死んだ赤ちゃんを負ぶっていた女の人、目が飛び出た人。地面には死体が転がっていました。地面は熱くモンペの下が焦げてなくなり、ゴム性の靴の底が熱で溶けて足が痛くてたまりませんでした。

寮は爆風で倒れていました。寝るところがなくて裏山のカボチャ畑で野宿しました。三日間ぐらい野宿した後、飽浦工場に行き、後片づけをしました。

〔急性症状の発現〕

八月二十日頃、私は汽車に乗って郷里の星倉に帰りました。八月末頃から、熱が出て体がだるくなりやがて髪が抜けだしました。丸坊主になり、母親がかわいそうだと言って使い古しの敷布で帽子を作ってくれました。下痢、血便が出て止まりませんでした。

私を見た父親は「疫痢だ、隔離しないと兄弟にうつる」と、私を漬け物小屋に閉じこめてしまいました。今でもそのときの事を思うと恐怖、怒り、悔しさで涙が出ます。漬け物小屋には一カ月くらい閉じこめられ、じめじめした土の上に寝て過ごしました。母親が「このままでは死んでしまう」と食事を持ってきてくれ毛布を被せてくれましたが、父は「いつ死ぬかわからないのに毛布を着せてやる必要はない」と言ったそうです。

十月頃、首のリンパ腺が腫れて首がまわらなくなったため、母が飫肥町の鈴木病院に連れて行ってくれました。診察した医師は私に、「長崎に行かなかったか」と聞きました。地元の女学校から長崎に行った二人の女の子に同じ症状が出ていることを説明し、あなたの病気は原爆のためだと言いました。私は注射を打ってもらいました。

〔私の訴え〕

急性症状は次第に治まっていきました。私はその後、結婚、子供を育てながら戦後を今日まで生き抜いてきました。小さい頃は健康でしたが、被爆した後は体調がすぐれず、ちょっとしたことで病気をするようになりました。

裁判長、もしあなたの家族が被爆したらどう思うかと想像してほしいのです。私たちの訴えに十分耳を傾け、被爆者の救済を怠る国を断罪して下さい。

原水爆禁止2004年世界大会・広島
被爆60周年に向け、核廃絶の大運動を！

原水爆禁止世界大会・広島が８月４～６日に、被爆地広島市で開催された。大会には23カ国、38団体、８国際団体の代表、政府代表66人をはじめ、全国から7800人が参加。開会総会・閉会総会はそれぞれ広島県立総合体育館の２階席まで埋め尽くされた。

アメリカの理不尽なイラク戦争は、一年以上経った今でも未だ解決に至っていない。戦争の口実にしていた大量破壊兵器を、イラクは当初から所持していなかったことを知りつつ、開戦に踏み切ったことなどが世界中の非難を浴びており、それに荷担した自衛隊のイラク派兵の不当性も明らかになって来た。また、アメリカ軍が湾岸戦争以降、使用してきた劣化ウラン弾の影響とみられる健康被害がイラクの人々、子どもたちに現れ始めている。

今年、愛知の『セイブ・イラクチルドレン名古屋』が、名古屋大学病院にイラクから白血病のアッバース君と二人の研修医を招いて、イラクの現状と支援の必要を全国に訴えた。

こうした国内外の情勢のもと、今回の大会は「『今、核兵器の廃絶を』の大波をおこそう」を合い言葉に開催された。

被爆六十周年にむけた開会総会

開会総会は、熊谷金道議長の開会宣言で幕を開け、主催者報告で、安斎育郎氏が「来年五月は、ＮＰＴ（核不拡散条約）再検討会議、被爆六十周年と節目の年。『今、核兵器廃絶を』の大運動を起こそう」と、女優の宮沢りえさんをはじめ、多くの著名人が賛同している新しい国際署名の普及・活用を訴えた。

特別発言で、秋葉忠利広島市長は、今年八月六日からの一年間を『記憶と行動の一年』とし、来年五月、ニューヨークで緊急行動を行うことを述べ、「来年を核廃絶の芽が萌（も）えいずる希望の年にしていこう。また、二〇二〇年を核兵器廃絶の目標年とし、二〇一〇年までに核兵器禁止条約を締結するという中間目標を織り込んだ行動プログラムが採決されるよう緊急行動にとりくむ」とのべ、協力を呼びかけた。

多彩な関連行事

五日には広島市内の各地で、『核兵器も戦争もない世界を』『被爆電車に乗って―親子で学ぼう・動く分散会』を含む十三の分科会や、参加各国の政府代表との国際フォーラム、関連行事として『全国高校生平和集会』や『問い直そうヒロシマ・ナガサキ、被爆者の目と人間の心で』など四つが催された。

平和憲法のある日本の役割

六日の広島市原爆死没者慰霊式ならびに平和祈念式典で、秋葉市長は「世界に誇るべき平和憲法を擁護し、国内外で顕著になりつつある戦争並びに核兵器の容認の風潮をただすべきだ」と憲法第九条の擁護を求めた。また、小泉純一郎首相は、昨年読み上げた文の順序を入れ替えただけのあいさつをし、憲法問題には触れず、被爆者の声を聞くことなく会場をあとにした。

世界大会の閉会総会では、広島で被爆した大阪出身の漫才師・喜味こいし氏が被爆体験を述べ、「原爆をこしらえて地球を壊すのは、いかんこと。人類は戦争をやめましょう」と訴えた。特別発言として、国際反核法律家協会のＣ・Ｇ・ウィラマントリ氏（国際司法裁判所元副所長）が「人類が核兵器を廃絶しなければ、核が人類を廃絶させるだろう」とし、『最大の危険』は、核戦争が過去六十年近く起こらなかったから今後も起こらないだろうという『自己満足的な誤った認識』だと指摘し、「来年は核兵器終焉に向けた具体的な第一歩を踏み出さなければならない」として、核兵器を禁止する国際的な道徳原理をうわべだけのものとせず、「人々の良心に徹底的に教え込むべき」だと強調した。

大会運営委員の高草木博氏は『原水爆禁止二〇〇四年世界大会国際宣言』のなかで、「日本が平和憲法と非核三原則を守り、核兵器廃絶に積極的な役割を果たすことはアジアと世界平和のためにも重要な課題です。被爆六十周年の二〇〇五年を、核兵器の恐怖から人類を解放するための国際行動の年とし、地球規模の運動に発展させましょう」と述べ、最後に原水爆禁止二〇〇四年世界大会―広島決議と広島特別決議を読み上げ、会場からの大拍手によって採択され閉会した。

【発表された広島決議は一二頁に掲載】

原水爆禁止2004年世界大会・広島決議

広島からのよびかけ

原爆の惨禍の中から核兵器禁止の声をあげ、世界の声としてきたヒロシマで、私たちは核兵器廃絶の運動を飛躍的に強めようと誓い合った。世界は、戦争と核兵器使用の危険が強まる一方、「第二のスーパー・パワー」とよばれる諸国民の世論と運動によって、平和を切りひらく可能性もひろがっている。

非同盟諸国、新アジェンダ連合の政府代表、世界と日本の反核平和運動の代表が集った原水爆禁止二〇〇四年世界大会国際会議は、核不拡散条約（NPT）再検討会議が開かれる被爆六十年の二〇〇五年を、核兵器の恐怖から人類を解放するための国際行動の年とし、地球的規模の運動を発展させようとよびかけた。私たちは、日本列島のすみずみに運動をひろげ、被爆国日本の運動として期待にこたえよう。

一、二〇〇五年五月のNPT再検討会議にむけ、前回のNPT再検討会議で核保有国がおこなった核兵器廃絶の「明確な約束」の実行をせまる圧倒的な世論と運動をまきおこそう。そのために、広範な人びとの反核平和の願いをひとつにむすぶ「いま、核兵器の廃絶を」署名運動に、全国の地域、職場、学園で大規模にとりくもう。

NPT会議にさいして、広島、長崎両市長をはじめとする平和市長会議が提唱した五月一日ニューヨーク大行動や、日本と世界各国からの署名の共同提出、国際平和行進など、多彩でゆたかな行動をくりひろげよう。平和市長会議の提唱にこたえるよう各自治体に申し入れよう。

今秋の国連総会で、核保有国をふくむすべての政府が核兵器廃絶をもとめる諸決議に賛成し、核兵器全面禁止国際協定の交渉にふみだすよう要求しよう。アメリカに核兵器の使用と開発計画の放棄をもとめよう。

二、日本政府が被爆国にふさわしく核兵器廃絶のための積極的行動をとるよう要求し、「非核三原則」の厳守・法制化、「核の傘」からの脱却を強くもとめよう。

核兵器使用ふくむアメリカの先制攻撃戦争に日本を参戦させるための憲法改悪を阻止しよう。国民の反核平和の願いを結集し、広範な人びととの共同をひろげ、憲法九条を守ろう。

イラクからの自衛隊即時撤退をもとめ、有事法制の具体化をはばもう。沖縄・名護新基地建設、横須賀への原子力空母母港化計画をはじめ、日本を世界規模の核出撃基地とする在日米軍基地の再編強化に反対し日米軍事同盟解消の世論と運動をひろげよう。

三、原爆症認定集団訴訟の支援をはじめ、被爆者との連携を強めよう。原爆展や証言活動、原爆遺跡保存など被爆の実相を伝える活動を被爆者とともにすすめよう。

世界の核被害者との連帯を強めよう。

「いま、核兵器廃絶を」―この共通のスローガンのもと、世界中の人びとと手をつなぎ、いまこそ行動に立ちあがろう！

二〇〇四年八月六日
原水爆禁止二〇〇四年世界大会・広島

●会費納入のお願い●

二〇〇四年度の会費の納入をお願いいたします。納入に際しましては、同封の郵便振替用紙をご利用いただくか、左記の銀行口座あてにお振り込みくださるようお願いいたします。

■UFJ銀行・八事支店　普通預金108―297
「核戦争に反対する医師の会」

＊　二〇〇三年度の会費が未納の方には、併せて納入いただけますと幸いです。ご不明な点などございましたら、下記あてにお問い合わせください。

☎　052―832―1345

▼核戦争に反対する医師の会は左記の文書を送付しました

要請文：「私たちは放射能兵器―劣化ウラン弾伸しように反対します」（二〇〇三年十一月一日）国連事務総長、ブレア英首相、シラク仏大統領、米共和党、米民主党、米民主党のダイアン・ファインシュタイン氏へ送付

声明文：「イラクで人質事件に遭遇した人たちに対する「自己責任論」に抗議し、改めて自衛隊のイラクからの即時撤退を求める声明」（二〇〇四年四月二十七日）小泉首相、川口外相、石破防衛庁長官へ送付

▼IPPNW世界大会・北京会議に代表を派遣しました

九月十六日から二十日まで開催される世界大会に中川武夫、山本節子両世話人を派遣しました。派遣のためのカンパにご協力をお願いします。ご協力いただける方は会費と併せてご送金いただければ幸いです。